

千石川河床の手取層群

上市川上流地域には、北陸地方の中生代の代表的な地層である手取層群の地層が見られます。分布域は上市川第二ダム上流の豆山橋付近から上流の千石川と小又川です。小又川では、風化した地層が多く、分布域の広さの割には小中学校の観察に適した地層は多くありません。一方、千石川河床では、豆山橋から500mほど上流の砂防ダムによる土砂が堆積した河床及び左岸に観察に適した地層が見られます。この地域の手取層は、約1億2000万年前に大陸上で堆積した陸生層と考えられています。主として砂岩層と泥岩層の互層から成っていますが、泥岩層には保存の悪い植物化石片を大量に含みます。また、付近の砂地には、増水時に作られた水流跡が多く見られ、5年生の「流れる水のはたらき」を学習するにも適しています。



ここでは、地層の断面が観察できます。小学校理科の教科書では「水平面での層の広がり」が、中学校では「重なりの規則性」に目を向けるような内容になっていますが、この両方の教材として、この露頭の活用が考えられます。



千石川河床に見られる露頭



水流による侵食跡が見られる



千石一ノ谷の露頭